

利根川圖志

二

| | | | |
|-----|---|---|---|
| 和書門 | | | |
| 三 | 六 | 四 | 九 |
| 二 | 一 | 八 | 號 |
| 函 | 架 | 冊 | 類 |

| | | | |
|------|---|---|---|
| 內閣文庫 | | | |
| 三 | 六 | 四 | 九 |
| 二 | 一 | 八 | 號 |
| 函 | 架 | 冊 | 類 |

| | |
|------|---------|
| 內閣文庫 | |
| 番號 | 和 36489 |
| 冊數 | 6 (2) |
| 函號 | 174 118 |



Kodak Gray Scale

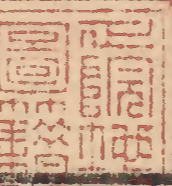
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



利根川圖志卷二



下總 布川 赤松宗且 義知 著

利根川上中連合

利根川の全流凡七十餘里その大小不因てこれを上中下の三不

分つ即本源上野國利根郡藤原の奥より二十八里餘を経て渡良

瀬川落合の處不至るこれまでを上利根川といふかくて武藏國

葛飾郡栗橋御關所の前不至て官渡あり房川渡といふ川幅凡三

里不以下分れて二支と爲る南を權現堂川といふ島川の東不權

名起る此の川長二里許關宿不至り赤堀川の分支ある逆川を并

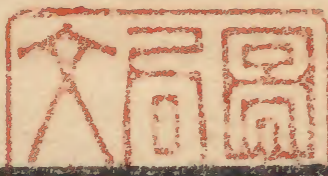
せ江戸川とあり下總國葛飾郡堀江新田不至て海不入る北を赤

堀川といふ長一里半許廣六十間より二百三十間不至る再分れ

て逆川と爲り平時ハ南して江戸川不落つ洪水の時ハ關宿の枕

行して中利根川不落この三川の間二島を爲す合せて五ヶ村島と

利根川上中連合



いふ佐伯川これを分つこの島始ハ五村あり一赤堀川の下即中
利根川凡十六里餘を經蠶養川落合の下ふ至て下利根川と爲る
古昔利根川の流ハ今の處ありて尚南方に在りき今これを古利
根川といふ今の利根川上中連合の邊ハ古の下河邊庄櫻井郷か
り古河より關宿邊までをいふ五村島の内江川中古鎌倉より奥
新田古名櫻井新田といへるもこの故あり
州ふ行くむとてこの邊を過ぎし事疑か
か、り花輪澤入古峯原峠を越え終ふ高原峠を經て奥州會津ふ
入り一ありむと下野鹿沼ある山口安良が押原推移録中巻ふ
へるハさる事にてこの許多の人の經過せし中ふ遺物の有るハ
道とハ固より異あり
中田光了寺ふ藏せる静女舞衣あり前林を經て伊坂ふ幸せ
る由静女舞衣縁成氏朝臣の古河城ふ住し藤田氏の關宿ふ在り
起ふ見えたり
一頃ハ士民羣集の街あるべし道興准后の村君武州埼玉郡に上
村有阿佐間の地郡を經て古川中田郡山ふ來り多ひ更に鎌倉より
鳥喰を過ぎて佐野舟橋の方に行きあへるハ文明十八年の秋あ

りこの地後ハ北條家ふ屬せしが天正十八年小田原落城の後
東照神君ふ歸し元和止戈の後この處官渡と爲れり當時下野以
北ふ行くに必由の要路あり

利根川在下總國俗說飲此水者令人 羅山先生

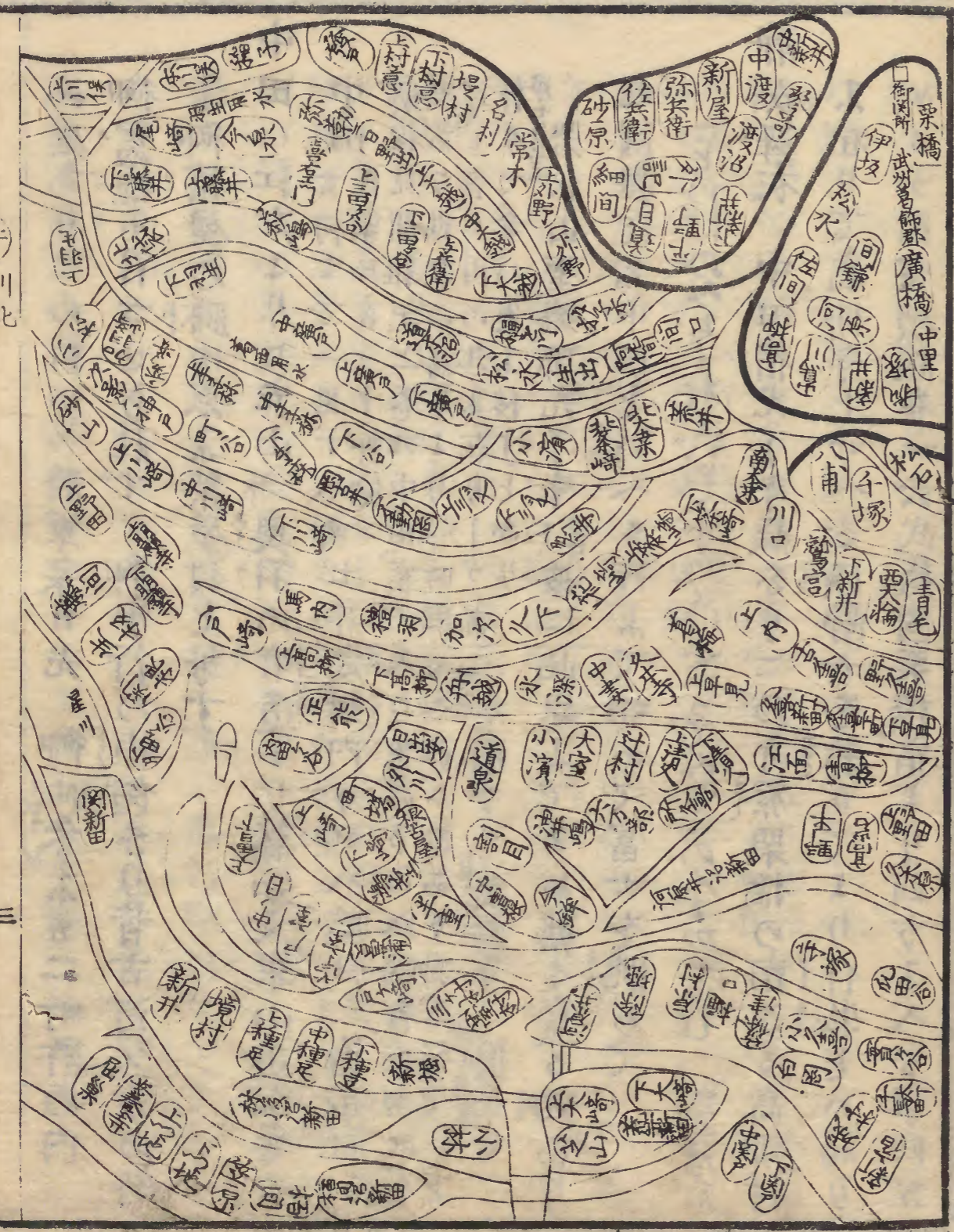
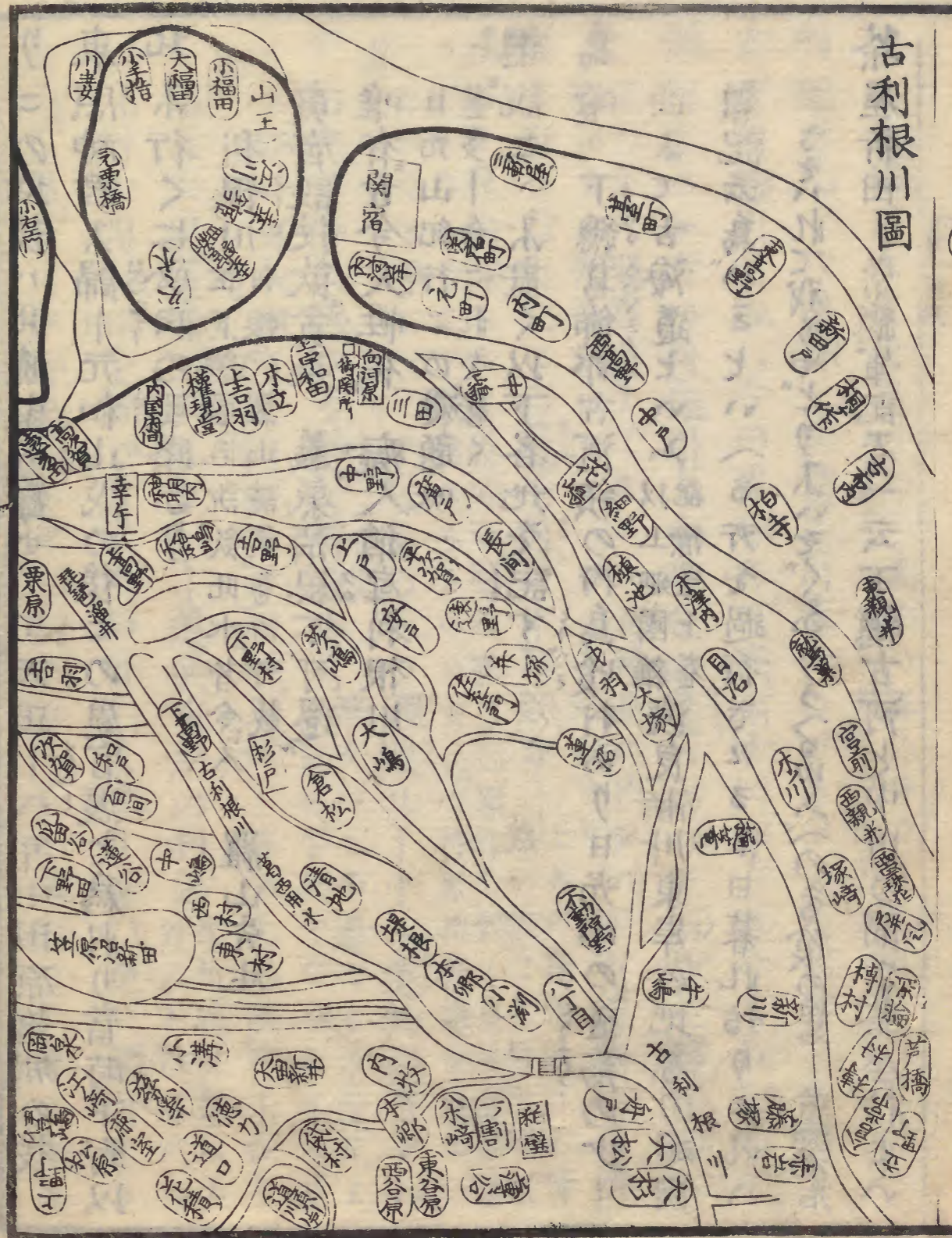
夷齊設使飲貪泉 義氣清風不可遷
唯有古今天性在 癡人猶守利根川

日光山紀行この題題咏
甚多し今これを畧く
總説こ、ふ盡く以下各地を記す

鳥喰 下總葛飾郡古河領の内鳥喰村あり日光山の道筋の少し
西ふて古海道といふ以上廻國雜記標注上卷 渡良瀬川東岸の地あり廻國
雜記云鳥ハミといへる所を過行きなるふ日暮れ倚りればハ
さそはれて我もやどりふいそぐありうへるゆふの多喰の里 道興准后

茶屋新田 常總軍記卷一云下總古河と中田の間ふ茶屋村とい

古利根川圖



北三三

三

ふ處ありこの所ハ 將軍家日光 御社參ふも二町許の内
御駕籠不召させられず 御歩の恒例あり昔古河公方の時
ふ御茶屋の跡ゆゑ茶屋村と号す

中田 江戸より日光山 并奥羽の官道あり藤知文東山志上卷云

中田 古河まで一里十八町 土井彦封内寺社八幡社 香取社
驛程見聞雜記上卷云中田宿の入口東の方に八幡香取兩社合
殿あり往來の鳥居より一町餘も入れれば社あり神さびていと
尊り昔ハ川の北に在り一ヶ瀬 本願寺 萬福寺 淨土真宗
替りて今ハ爰に移すとあり 岩松山聖徳院光了寺 下按に此處ふてまめ藥を賣る効あり

廻國雜記云中田といへる所ふて始めて富士を眺めて

静女舞衣 中田宿光了寺藏ありこの寺原栗橋の南なる高柳村
ふ在りて高柳寺といへる頃静女を葬りてより什物とい爲り
るる閑窓瑣談卷一云武藏國栗橋宿より西方ふ入る事四五
このはのみちもおふふのをいふてみやこのふかむむ 道與准后

町高柳村の内松永といふ處ふ杉あり昔よりしてこの杉を静
の塚と言傳ふ近頃中川君の立てさせ多ひ一碑あり静女塚と
記す云この説由ありてきこゆ 日光驛程見聞雜記上卷栗橋條
内宝治戸といふ所ふ静の墓印の杉の大木あり静御前義經の
迹を遂ひ此所ふ來り奥の高館ふて戦死すと聞て俄ふ病で死
六丈七尺張り十五間圍二丈三尺今年五月關東の郡代中川飛驒
寺賢を捐てその事を石ふ勒して樹下ふ立つとあり以上ハ
享和三年の事とぞかく二處ふ同人の墓あるハ一ハその侍女
琴柱の墓ある この寺古ハ天台宗あり一ハ今ハ淨土真宗ふて
報恩寺末あり 改宗の事静女舞衣縁起ふ建保年中宗祖親鸞上
浄土真宗光了寺と改号せり御弟子と爲り西願と法名給ハ
郎國村の次男出家して權大僧都法印圓崇といふとハ
この舞衣の事縁起云後鳥羽院の御宇一歳大旱魃して耕草連
枝も枯果國民の愁安からず貴僧を請ふ兩乞執行まませと
も一滴の潤ち一公卿詮義の上一百人の舞姫を集め神泉苑の
池ふて法樂の舞を舞ハせむふ九十九人まで舞ハれれども

その験あまか、百人目あ静しず既し不ず舞まハむとせし時御棧鋪御簾の内より御衣を下さる乃静頂戴ちやうたいしてこれを著ちかし舞まひこれバ車軸しやぢくの如く雨降りり即この舞衣あり蛙あま蟻り龍りゅうの舞衣といふ静しずの事義經記卷五静吉野山しずきちの捨すてりる、事條云一歳都みやこ不ず百日の早はやの有りここ三院さんいんの御幸ありて百人の白拍子の中なか不ず静しずが舞まひ下くだされりここ三日さんじつの洪水流みづながれれ若わ宮みや八幡宮やちまのみやへ参詣さんぎの事條等及および諸書しよしょ不見みえりり云い猶なほ卷まき六む静しず若わ宮みや八幡宮やちまのみやへ参詣さんぎの事條等及およハその時の祿ろくはて文ぶんは螭し龍りゅうおどつきつきいいふるべし衣い然しかれバ義經公頼朝公の御勘氣を蒙まうり落人おちとあり多おほふ静しずハ義經公のおもひ人ひとかれバ鎌倉へ召され義經の御行方問ハせまませまませとと知りざる故御暇ごいさま下くださる静思しずしふ後義經公吾妻ごさい不ず忍しのび居ゐるハむ幸さいに是こまで下くだり空くく都みやこ歸かへりむ事無念むねんあり御行方尋ゆねむとと按あに静しずが鎌倉かまくら不ず下くだりハ文治二年三月一日ぶんぢにねんさんげついちにち一いて義經朝臣ぎけいしやうしん高たか館たか自みづか盡じんハ同五年閏四月廿日どうごねんうんしがつにじふにちありされバ静しずの奥州下おくしゅうくだりこの時ときの事ことハ非ひず義經記本文ぎけいきほんぶんハてんりうてんりうの麓ふもと不ず尼にと爲なり行ゆひすままハて廿歳にじふさいの由よしを聞きて静しず不ずありて松風庵しょうふうあんの評判ひやうはんハ義經奥州ぎけいおくしゅうよよて自害じがいの由よしを聞きて静しず不ずありて松風庵しょうふうあんの評判ひやうはんハとつきて暫しばらく嗟あはれれの邊へら不ず在ありり後南都ごなんと不ず住すミミととあり又奥

州の方へ下りくだりりとといへりりと侍女琴柱しむすを召連當國下邊見よめとあれバさる説せつも有りありりと侍女琴柱しむすを召連當國下邊見よめといふ里まで下りくだりり然しかるら不ず往來わうらいの人々ひと々々不ず義經公の御尊ごそん申まをりり静御しずごあつかいく思おもひ御行方尋ゆねむとと公こうハさる頃高館たかたか不ずて空くくありり多おほふと語かたとあへず静しず泪なみだ不ず袖そでを沾ぬりり實じつ不ず頼たのみ少すくき世よの有様ありさませせひ陸奥りくおくまでも尋たづね行ゆくむむと思おもひひ不ず心を盡つくし、甲斐かいも無なく浮世うきよ不ずかかめめハ剃髮ていさつ漆衣しつえの身みとかりて義經公の未來御菩提みらいごぼだいを弔たづねハむと橋はし即下邊見すなはちしもへを踰こええて日光驛にっこうえき程見聞雜記上卷茶屋新田條じやうけんじやう不ず是こより東の方十町餘とうのほうじゅうじやうごの所ところ不ず在ありり土橋つちはしを静御しずご前まへの思案橋しあんはしといふ静義經しずぎけいの跡あとを慕ねがひひの所ところ不ず在ありり奥州おくしゅうへ行ゆかむや止とどめむむと思案しあんせせハ河かの所ところありりといひ傳つたふふといひ下くだりり寶曆七年ほうりくしちねんの橋はし下くだりり水みづを古河こがの前林まへはやしといひ弘法こうぼうの加持かぢ水みづありりとて参詣さんぎ羣集ぐんしゆししる事ことをいへり前林まへはやしといふ里さと不ずかかりり中畧ちゆうりやく自分手元の柳おのれでんねんのやなぎを引結び迷まよひひ道みちの印しるしと爲なすす都みやこの方ほうへ向むかひひ結むす柳やなぎをそれより西にしふ當あたり伊坂いさかといふ里さと不ずかかりりありり

川北

五

静女舞衣圖

長二尺五寸

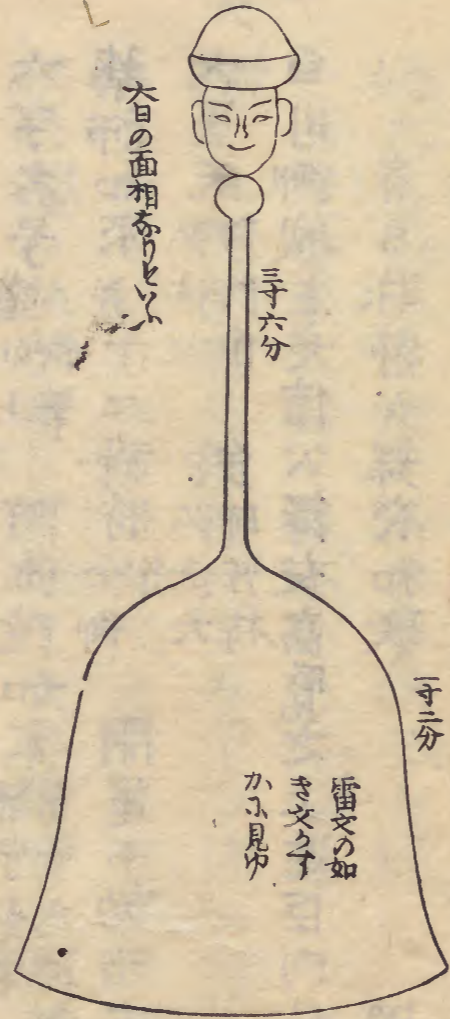
地黒く種々の絲にて文を繡せり

幅一尺五寸五分



弘法大師鈴圖

銅色甚古



寸二分

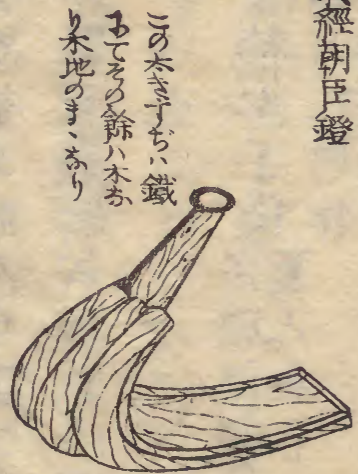
雷文の如
き文とす
かゝ見ゆ

底徑 一寸七分五厘

大首の面相ありとす

寸六分

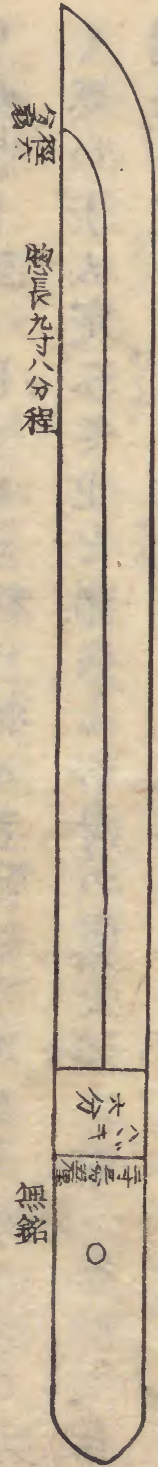
義經朝臣鐙



二の太きすちの鐵
もてその餘ハ木也
り本地のまゝあり

静女煉劔

義經朝臣所賜



山嶽

惣長九寸八分程

六分

無銘

り多ひいふいと、さえ秋ハ物うき習ふりけるふ旅の疲と均
 く思はずも定なき世と諸共ふ野邊の露と消えぬふ琴柱泪と
 諸共ふ當寺ふ葬り一墓の印ふ一本の杉を植ゑおく今ふこれ
 を一本杉といふこの時守本尊 并頂戴の舞衣義經公形見の懷
 劍當寺ふ納り常什物と爲り畢ぬ
聖德太子像 宗祖親鸞
 聖人御作
 鑑 義經公奥州御下向の時預けり
 即永錢一貫文御用立と傳ふ
覺如上人御作
 法眼淨賀筆
 十字名号 全蓮坐御影繪御銘御贊
六字名号 蓮如上 阿弥陀如來 靜守本尊
 慈覺大師御作
 藥師如來 并十二神將全御
 開運不動明王 智證大
 師御作
 大黒天 師弘法大
 師御作 鈴 師弘法大
 師所持
 白川御城主定信公舞衣高覽之上近臣内外函被爲奉納者也
 春日詠靜女舞衣和歌
 源德純 新田氏
 やまのはふちまふ袖のまつらふぞたふひく雲と雨とやある

題妓靜舞圖

大窪行

嬌容 婁娜太多情 柳弄 臂肢風力輕
 一曲霓裳羽衣舞 誰知中有鬪牆聲
 大櫻 日光驛程見聞雜記上卷中田條云宿より東の方一里足り
 ず大山といふ所ふ大光院といふ修験の寺あり寺内ふ圍三丈
 程の櫻の大木あり單辨ふて香ありといふ
 熊澤蕃山墓 大堤鮭延寺ふ在り先生名ハ伯繼字ハ了介 又了號
 海
 ハ蕃山又息遊軒といふ備前ふ事へて功績あり文學ハ人の知
 る所ありその行狀ハ門人巨勢直幹の實記草加定環の行狀菱
 川大觀の傳記ありといひて先哲像傳卷二ふ定環の行狀をあ
 けり文中先生の功績をあげたるハ正保乙酉備前侯依京極
 主膳再求以祿之。于時先生歳二十七。備前國政大革。承應甲午備
 之前中二州大飢。窘迫及九萬人。國老不知計爲。乃委事於先生。先

三 川北

生出命施政。民大賑。尋修隄池。蓄瘠磽。上下得所。安遂設庠序之教。其舉皆出先生。及其家弟與焉。制減佛寺。壞淫祠。といへる。ふて知るべし。後故ありて。備前を辭し。明石に在て。松平日州疾ふ事へ疾の移封ふ。古河ふ。從ひ上表ふ。因て罪を。幕府ふ。獲頼政郭ふ。禁錮して終る。元禄四年辛未八月十七日。壽七十三。鮭延寺に葬り。儒禮を用てす。この寺ハ鮭延越前の舊臣主の爲ふ。建つる所あり。鮭延ハ出羽の地名。越前ハ最上義光の舊。臣事ハ常山記。談明良洪範等ふ見えたり。

三島大明神社 水海村に在り。廻國雜記云。下總國こ不りの山といへる。所ふ伊豆の三島を勸請し奉りて。大社ましく。りかの別當の坊ふ。暫逗留し。侍りたる内ふ。哥ふと度々いひすて。とと少々書しおき侍る。たづね來てとふ。こまのおか。名をおま。どろのまほ神風。道興准后

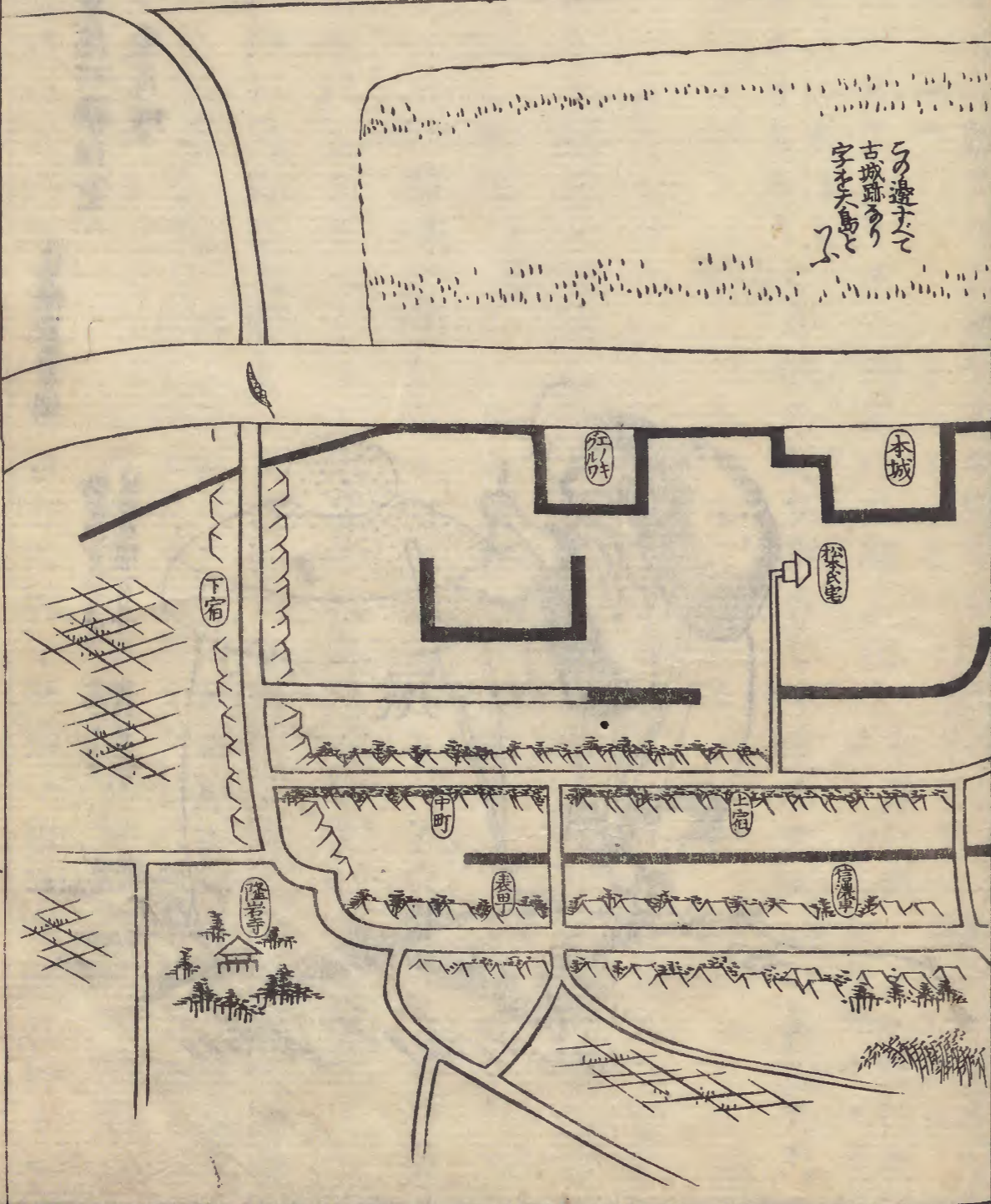
標注云。下總葛飾郡郡山郷水海村に在り。三島大明神社領五石

別當滿藏院古河よりハ東の方栗橋の北東に在る村あり。云々。准后同時富士蟲初雁葛菽の吟。諸國圭齊録。下總國部新義真言のあり。この處の歌枕とすべし。諸國圭齊録。下總國部新義真言の中ふ五石。三島別當。葛飾郡郡山郷水海村。滿藏院と見えたり。この餘曹洞宗ふ十法華宗ふ五石。葛飾郡水海村吉祥寺。日光驛程見聞雜記上卷中田條云。又一里東ふ水海村あり。昔梁田家の領せし。所あり。その村の名主鱈口を所持す。是ハ三島明神へ寄進せし物あり。文龜三年八月日。梁田右京亮平宗助と鑄付れて有り。同村ふ北條氏直が虎の印を居ゑたる。旋書を所持し。さる百姓あり。惣てこの邊に梁田家臣下の子孫多し。この所。中田をの名高き。繭の藥を賣る。齋藤源太左衛門と先祖ハ彼の家のおかり。梁田ハ五十万石程領せし。大名ふて有り。たるとそ。本注。按ふ。右京亮宗助ハ康正の頃古河の成氏に屬し。上杉と戦ひし。出羽守が子孫あるべし。梁田ハ關宿の城主かり。云々。五ヶ村島 下總國葛飾郡に屬す。南ハ權現堂川北ハ赤堀川東ハ逆

川の間ふ在り又佐伯川を以て川妻と其の餘の十一村を分つ
 これも古五村ありしが今かく分れしあり古ハこの地下河邊
 庄櫻井郷不屬すこの名の存せるハ櫻井新田村今江川新田と
 内ハこの島この島ハ小手指村あるを以て小手指差原の地とす
 る者ハ誤あり小手指差原の名ハ新葉集宗良親王歌の詞書ハ
 義興義治の三將足利尊氏と戦ひ北の方六七里四方の地をいふ
 差原ハ武藏野物部天神社より西北の方六七里四方の地をいふ
 へり然武藏野物部天神社より西北の方六七里四方の地をいふ
 下練馬村ハ小手指差原の舊地ある由ハ土人の説ト書言字考卷
 一ハ小手指差原の舊地ある由ハ土人の説ト書言字考卷この島
 小ありと雖古河城の舊址トヨブノ砂山富士見渡等の勝景あ
 り又有土の寺多し
 諸國圭齊録下總國部曹洞宗ふ二十石山王村東昌寺十五石東栗橋
 院五石同村寶泉院まゝ五石新義眞言本栗橋村寶藏院五石同村千手院五
 石小手指村勝光院まゝ法華宗ふ十石葛飾郡栗橋法定寺浄土宗ふ十石本栗橋隆岩

寺五石冬木村大泉寺この寺の後人江戸深川冬木町を墾てこゝに住
 一今猶古河公方の文書を藏すといふ又關東古戦録ふ載ま
 せらる里見の臣冬木丹波守ハこの同族ある由緒ある寺院の
 五石本山修験橋西光院と識せりこの處かく由緒ある寺院の
 多うるハ古河公方の座せし因りてあり
 幸館村ハ生月の塚あり下ふ載す生月といふハ信けがさ
 川妻 五村島の西隅あり佐伯川を以て東部と分つこの村の舊
 家不築田河内守持助の感狀上杉輝虎及び直江兼續の書を藏
 する者あり傳來未詳からず又古き膳枕十具あり傳説最奇か
 り共下ふ載す
 古河城舊址 五村島元栗橋ふ屬すこの地權現堂川を掘りし
 り城址も栗橋も二ふかれり今御關所ある栗橋ふ對へて此處
 を元栗橋といひ川を夾て共ふ城山といふ本城榎曲輪七曲上
 宿中町下宿古河町信濃町表町隆岩寺嘯雲山といふ浄土宗ハ

府外 開國 幸牛道



この邊に古城跡あり字を大島とす

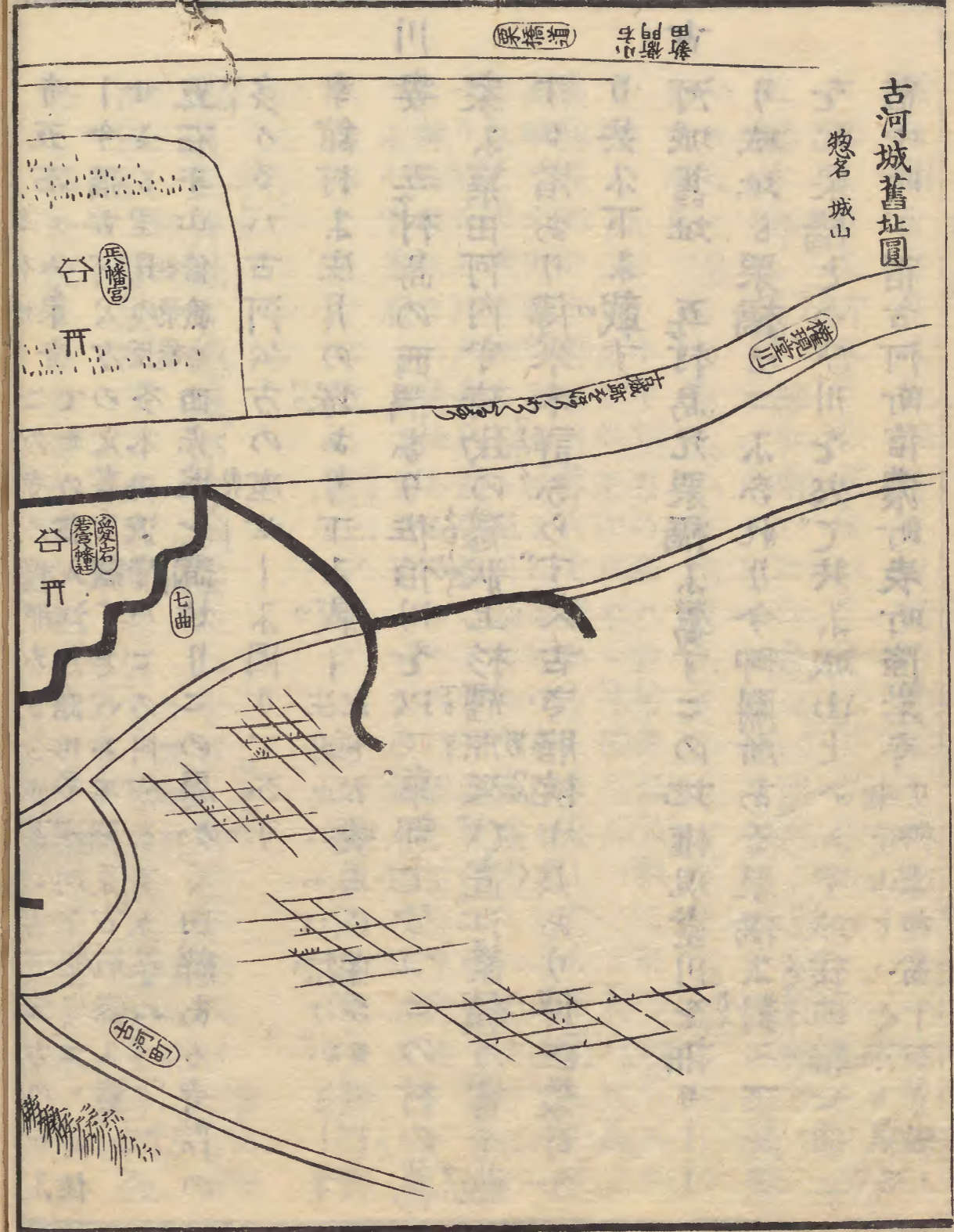
島

+

田舎山 新開

古河城舊址圖

惣名城山



幸館村薬師堂
生月塚

元栗橋隆岩寺領

物高四尺四寸五分
高三尺
笠石前幅一尺九寸
奥行一尺六寸



岡崎信康君の法號喇雲院殿隆岩超あきこ愛宕若宮八幡社七曲の内
越大禪定門といへるふとるといふハ川北ハ在り正八幡宮ハ川南ハ在り外國府間ハ小右衛門新
といふ古河ハこの城の起立詳さしかりず今の古河城ハ長祿元年
田ハある名ハありこの城の起立詳さしかりず今の古河城ハ長祿元年
小成氏朝臣の築きく所ハありさてそれより七十年前ハ至徳
三年五月七日小山若丸ハ官方ハと爲りて小山ハ在祇園城ハ籠これ
る事を鎌倉大双紙上卷ハ記まして鎌倉殿ハ七月二日御發向古
河城ハ御座中畧ハ十一月ハ鎌倉ハ御歸陣ありといへりされハ
今ハいふ御番城ハの類さるるさる因ちふ由りて成氏朝臣ハこの邊
不止と止まれるあるべしさて永享十二年結城合戦の時結城方より
野田右馬助を大將トして矢部大炊助以下古河城を繕つくて楯籠も
ると同書ハ不見ゆ按ハ野田ハ下野國ハ藤田郡ハの地名ハあり嘉慶元
書ハ記せるハハその年ハ丁卯五月十三日古河住人野田右馬助ハ同
り移しれるあるべしその明年ハ嘉吉元年四月十六日結城
落城ハの下ハの文ハ同十七日古河城を攻はべき由相觸ふれりる

少時所書... 陽... 体... 行...
... 會... 爲... 志... 操... 心...
... 志... 操... 心... 志... 操...
... 志... 操... 心... 志... 操...
... 志... 操... 心... 志... 操...
... 志... 操... 心... 志... 操...

之 一 廿 蓮 尾 舟 也

槐 系 序 左 後

乃 作 善 法 在 乎 經 行 觀 佛 身
長 養 教 養 之 心 亦 終 終
多 之 故 圓 音 中 心 の 心 也 之
法 念 之 心 也 善 心 也 善 心 也
乃 心 希 之 法 之 義 重 重 之 心 也

培月 仰 初 張 之 也 以 行 系
多 世 心 心 名 也 以 長 物 正 也
海 國 之 一 二 一 動 一 多 之 正 也
法 師 之 思 一 正 也 正 也
此 之 抄 判 和 法 之 正 也
正 也 正 也 正 也 正 也

正 也 正 也

七月廿九日

正 也 正 也

梶原景時

正 也 正 也

川妻隠里膳椀圖説

圖する所ハ下總國葛飾郡川妻村名主藤沼太郎兵衛家藏あり
 昔藤沼氏野州河合里より來りてこの村を開くといふ村中ハ
 隠里あり饗應ある時ハそこより膳椀を借り來り事畢て、還
 す例あるが故ありて十具を遺一家不傳へさるが今猶一二を
 存すといふ朱漆古様頗奇品あり然れども神鬼の作不似ず傳
 へ聞く佐渡國雜太郡ニ岩不彈三郎狸ありて人ハ金を貸しに
 りそハ借るべき金の員數と還すべき日限を記し名印を押
 て置きぬれば翌日穴の口ハその金を置りりとぞ後ハ還さ
 ざる人多あり一ハ金を貸す事を止めて膳椀等を借る
 がこれさへ假さずありふきといへりこの川妻のとさる類不
 や有りむ彈三郎狸の事ハ燕石雜志卷五及び諸國里人談等不
 載せて人の知る所あり



累年之志信然

永之藝城喜且

海心藏於石少

然之若國日下

於禱之粒心

不為所公

壬午 甲戌

六日

羽部大瑞

夏ノ野田右馬助以下の人々結城を根城として楯籠りたるが
落城の由を聞て寄手の未近うざる以前小船取乗り行方不
知落ちふれり矢部大炊助以下残留りて野田讚岐守ふ誅と
いへりその古河といふハ古利根川ふ因れる名あるべし城天
正の頃ふと有りし見えて今の古河城修覆の間小笠原今の
信州侯權ふ移住せる事あり隆岩寺ハ其時の草創といふ今
古河城ハ康正元年六月十六日京都將軍義政公今川範忠ふ命
ド鎌倉を破るふ及て成氏ハ總州葛飾郡古河縣鴻巣といふ處
ふ權ふ屋形を立て關宿城ふ築田を籠め野田城ふ野田右馬助
を籠置といふ事鎌倉大双紙下巻ふ見ゆ河條驛程見聞雜記古
四五町ふ鴻巣といふ所あり古河公成氏の御所跡この後成
とぞその名のこいひ傳ふ烟ふてその形も知れず成
氏ハ武州國府ふ落ちそれより總州葛飾郡古河縣ふ落着敗軍
の士卒を集め下河邊城ふ籠りむひると同書ふいへり是今
の古河城ありそハ下河邊ハ古き左名あるが成氏朝臣のこ、

ふ座せしより縣の大名を稱する事とありあるべし按ふ永
成氏ノ移ラセ玉フハ故下河邊在司行平ガ館ト聞エシ古河城
ナリ其後城南鶴巢トイフ處ニ有御所作といへるハ前後の差
りあり松本勘兵衛といふ人あり古より古城迹ふ居て其處の事を
掌れり城迹草地堤堀共ふ六万坪外ふ田地十三町歩を有ちま
りしといふ今ハ古ふ如くすとあむ

つがふハみやこの乾何とあり古城山とひとそふあり古城庵
松本可成

沙山 元栗橋の新田トヨブふ在り方二町許こ、ふ登りて一望
すれバ川流四面を圍匝みま富士日光筑波の山々雲間ふ出沒ぞう
て風景最佳一春夏の間雅客遊觀の處とす

富士見渡 江川より關宿向河岸ふ渡る處あり富士の眺望此處
を最勝とす

六國山東昌寺 山王村東昌寺ふてハ山王山村といふ在り築田
御朱印文言ふ從ふあり
河内守滿助の菩提寺あり禪宗

制札寫

條々

下総國 東昌寺

- 一 當寺同門前百姓等急度可還位事
 - 一 寺家門前不可傳之并田畑主毛不可妨之事
 - 一 對寺中門前軍狼籍非分ニ族控有之不可為一淺切事
- 右着於遠犯ノ軍志忽可法處嚴科者也

天正十八年六月 日

鐘銘

大日本下總州下河邊庄櫻井郷六國山東昌禪寺大鐘

願主 大旦那 築田河内守持助

時文明八年六月廿四日 住持毗丘即菴老納

關宿城 二の城ハ古河公方の臣梁田氏の築く所あり梁田ハ從
 來下野國人ノて 今ふと下野ノ梁田郡梁田村あり 世々鎌倉公方に事ヘシりか

くて永享十年十一月一日築田河内守同出羽守等持氏卿の相
 州大藏御所を留守一三浦介時高と戦ひて死すこの後嘉吉元
 年四月十六日結城落城の時持氏卿の息春王安王の爲不築田
 四郎ハ長尾因幡守不討ニ此同出羽三郎ハ武田刑部少輔入道
 不討ニ此ニりかくて寶徳元年九月九日春王の弟成氏朝臣關
 東の都督と爲る不至て結城の一黨と同く出頭の臣ニりこの
 後康正元年六月十六日京都將軍義政公の命不因て今川上總
 介範忠鎌倉を破るこの時成氏朝臣ハ下總國葛飾郡古河縣鴻
 巣不移りて關宿城不築田を籠めニる由鎌倉大双紙下巻不見
 ゆその明年正月十九日成氏朝臣の命不因て南圖書助等七同
 く千葉介實胤の有ふる下總市川城を陥るこの頃築田河内守
 ハ關宿より打て出て武州足立郡を過半押領一市川城をとる
 と同書不見えニりこの後築田中務大輔頻不上杉と和親の事

を勸むこの後變革千般あり弘治二年十二月十五日北條氏康より晴氏義氏兩君を關宿城へ移し築田中務少輔政信をして守護せしめざる事關東古戦録卷六に見ゆこの後上杉輝虎を防ぐむとて加勢ふ來りし結城六郎晴朝と永祿三年正月四日柳橋ふ於て誤て同士軍せし事同書卷九に見ゆかくて天正元年閏十一月十七日築田中務大輔政信同出羽守綱政佐竹義重ふ降るを以て北條氏政の兵ふ敗りれ佐竹の遊客と爲り城ハ北條家ふ屬せる事卷十九に見えりさて同十八年七月十一日小田原落城の後同八月九日領地拜領す不總國古河小笠原信濃守秀政同關宿松平三郎太郎康元同關宿内岡部次郎右衛門長盛一萬二千石任内と房總治亂記不見之り因州侯の墓碑ハ臺町ある觀照山宗榮寺ふ在り當寺開基大興院殿前因州太守傑傳宗英大居士慶長八癸卯年八月十四日と鐫り背面ふ從四位少將松平氏源康元墓行年五十二歳卒又傍の標石ふ雖爲當寺康元之墓草創年來而自破壊于時明和三丙戌歲八月十

四日從五位下源朝臣松平久世家の領と爲りしハ安永三年ふ因幡守康郷修補之とありりかり今不至るまで嗣封の君侯世德澤を布き多ひて萬民鼓腹し市鄽繁榮あり東ふ臺町南ふ江戸町内河岸元町あり内河岸の對岸ハ向河岸ありこの二處問屋船宿多く最繁華あり江戸ふ行く旅人舟ハ向河岸より出づ江樓ふ柳樽を開き江岸ふ柳枝を折るその景況喩ふるふ物あり
 寺院ハ國花萬葉記卷十ふ松窓寺洞家關宿在り寺領廿石と見え諸國圭齋録下總國新義眞言部ふ十五石 葛飾郡關宿 昌福寺と見ゆ
 古河晴氏朝臣墓 宗榮寺後の園中不在 高五尺許土人字にて御所卵塔といふ晴氏朝臣ハ永祿三年五月廿七日卒を法號ハ永仙院殿系山道統あり





寄生
木樹

川南

三二



蛇
柳

大柳 關宿城東半里許葦場といふ處に在り故に葦場の大柳といふ中利根川より三四十間南方堤の内園の中あり廿年前ハ枝の下一丈許ありといふ今ハ草地と爲れり大枝三本分うれ各太三四圍南北延衰十四五間許南の枝ハ杉樹の寄生あり大四尺許その本幹の蟠るふ因て命にて蛇柳といふ一奇事あり時としてこの柳川北見えて夜行の舟ハ方向を失ハ一む此蓋層樓の類ふして川北の空氣映ずる者あり是を以てまゝ妖柳といふ

堀割 關宿の邊ハ卑溼ふして水患多し故に嘉永の初領主より命じて城東ある桐作木間瀬舟形木崎等の村々六里の間水道を作り水堀より利根川に落し永く水患無かりしむ民甚これ頼るこの桐作ハ眼科醫鳳梧あり畫を好む
春氣候此發者癩舞揚つけさけてそこのむきハぬぐこづけてまひあがる

これハツケタゲといひて古き相歌の由鳳梧この邊の事とと談る因ふ言へり

お、腹くつてう明神 水堀村に在り傳聞往年三月初午の日利根川洪水ふて大なる木の方ふして中ふ穴あきころが流來りしを朝艸刈る者共これを上むと爲しうと重さ白の如くふして揚らず乃繩ふて柳ハ繫置村人を聚め各飽食せしめ同音ふオ、ハラクチイナエンサラハウと囃しあがりこれを引揚にて産神祭れり今もその例ふ因て毎年當日右の木を神輿とし村中の新夫ふ昇かむ利根川の畔ふ十間四面の池あり祭の前日その池泥をとりて周ふ置くむ而當日神輿を池中ふ昇入る、ふ村人池周ふ羣集し同音ふオ、ハラクツテウエンガンバウイ、ツモカウナラヨオカンベエと囃しつ、泥を池より上りむとする人ふと神輿ふと擲ちてあげさてねバ困

いをてさる時昇人の妻どもわびて漸ふ池より上がりせ身を
も神輿をも利根川ふて洗ひ妻のもて来さる新衣を著るこれ
より村人神輿を受取り元の如く社ふ収むこれ例祭ありとぞ
我慢我慢とハ努力の義ふ轉言へりこの處水堀村の下ふて
衣川落合の衝あるからふ流頗急あるを舟子共聲を掛け今少
の間ぞ我慢々々と言ひより遂ふ名と爲りありこの處河
水最佳といふ
布施辨才天社 布施ハ江戸より松戸小金を経て水海道へのゆ
くてあり田中ふ孤山あり古ハ湖中の島ありとぞ辨才天を祀
る東麓ふ窟あり別當を紅龍山松光院東海寺といふ眞言宗常
陸國大塚護持院末あり寺寶ふ蟠龍石あり此處ハ關東三辨天
の一ふして詣人羣集一戸頭の渡舟を望み曙山の櫻楓を眺め
て頗勝景と稱する不足れり

縁起云昔大同二年七月七日の朝湖上ふ紅龍現れ一の塊を捧
げて島を作る天地震動一夜々光明あり天女里人の夢ふ入り
て但馬國朝來郡筒江郷より來れる事を告ぐ覺めて光を尋ね
窟ふ入れバ長三寸餘の尊像あり乃藁葺の小祠を建つその頃
弘法大師の經過ふ値ひてこの事を語る即大師嚮ふ筒江ふ於
て刻する所あり乃この寺を造り山を紅龍と命け里を天女の
利益ふ資りて布施と命かくて歸洛の後嵯峨帝ふ奏聞一弘
仁十四年田園を寄附一伽藍を造立す然るふ承平年中將門の
兵火ふ遇て衰廢す經基王武藏守と爲て箕田城ふ住する時此
處ふ來り忽瓦礫場松上の光を見狩衣の袖を刷ひ祈念せし
バ尊像即袖ふ移りふを奉持一天慶三年二月將門伏誅の後
この寺を再興一院を松光と命く今の本堂ハ享保の初法印秀
調が建つる所あり

取意○按ふ經基王武藏守非ず介あり將
門記ふ武藏守興世王介源經基と見えり



布施
辨才天社



蟠龍石
 按不龍丈石の事、素圓
 石譜卷三、魚龍石
 潭州湘鄉縣山之巔有
 石、中界間有石、兩面
 魚龍形、作蛇之勢、鱗
 鬣爪牙角甲悉備、尤鳥
 奇異、といへり、由り
 り龍文、黒色、ある由り
 見え、て、この石の青質
 白章、ある、比す、れ、バ
 いさく下り

大如圖
 實希世之珍
 祀也
 祀鳥宇賀神



この社地、於て八月朔日、毎年風祭相撲あり、又巳年の三月ハ
 必開帳あり、岡村の延命寺、埋めたる土偶及び駒塚、埋め
 三、見えて、葬送の具
 むるべき由いへり

玉椿登とんえてや布施筈
 白髪と春八ねまれ布施の森

其角 慎我

日 天子社 相馬郡青山村、在り、手賀沼の北、在り、土人ハ御天様
 といふ一奇事あり、凶年の時、社地、彫り、く、芥を生じて、近郷數
 百人の食、供す、然る、平年ハ、少も、無し、と、村長海老原氏、話さ
 り、又、この社の周、多く、生ひ、さる、篠竹を、截れ、バ、血流出て、その
 人、不崇あり、と、一と、伐る者、か、海老原氏、又一奇話を、いへり
 四月十八日、同村、勘助の妻、機を織り、居、に、廿四、五、歳、許、の、僧、來
 り、て、水、を、乞ふ、自、家の、井、の、地、を、視、び、て、吞、む、に、廿、四、五、歳、許、の、僧、來
 隣、より、乞ひ、て、與、へ、病、の、効、あり、と、傳、へ、去、り、を、持、り、明、の、日、見
 一、清水、あり、と、乞ひ、て、與、へ、病、の、効、あり、と、傳、へ、去、り、を、持、り、明、の、日、見
 一、清水、あり、と、乞ひ、て、與、へ、病、の、効、あり、と、傳、へ、去、り、を、持、り、明、の、日、見
 高、く、あり、と、乞ひ、て、與、へ、病、の、効、あり、と、傳、へ、去、り、を、持、り、明、の、日、見

川南

字六

禁せりる猶水を盗む者断えずとあむ

御寮法性墓 青山村の東都部村大龍山正泉寺禪宗本尊の地蔵菩薩の後

在り五輪の石塔あり法性ハ最明寺時頼の女あつにてこの寺を建立し命けて法性寺といふ然るハ一夜この尼住持の夢ハ現れて在世の榮華の爲ハ手賀沼の毒蛇どくしやと爲り十六の角を戴きハ万四千の鱗を生じ三熟の苦を受くる由をいひ血盆經一千卷を讀誦して苦惱を救ハむ事を請ふ覺めて後地藏講會を修せしハ夢ハ八旬餘の老僧來り明朝手賀沼ハ行き見るハ龍宮ハ藏する血盆經を汝ハ與へむ墮獄の苦を免れむと思ふ女人ハこの經を受持すべしとて乃夢ハ覺ふハ是地藏尊の化身なりとぞさて明旦手賀沼ハ詣りハ水卒すゐそつに動騰どうとうハ白蓮花一莖涌出ハ中ハ血盆經一部あり乃村を一部と命け山を大龍と命け寺號を正泉と改め題して日本最初女人成佛血盆經出

現第一道場といふ血盆經縁起取意

下利根川 蠶養川落口以下をいふ南ハ江藏地新田ありこの邊

より安食までを鱧魚の絶品とす

堀町 猿島郡の地關宿の對岸結城のゆくてハ繁昌の處

あり月々六載舟を江戸ハ出ハ以て行旅ハ便すこの下ハガッ

といふ處あり下小橋と浦向ハ屬す近郷より薪をこハ不出

以て中利根川ハ浮ぶ

女夫松 長谷村鶴戸沼の傍ハ在り結城のゆハ香取社ハ在り圍一

文許その葉晝ハ常の如く夜ハ合ハて離れず故ハ又眠松と

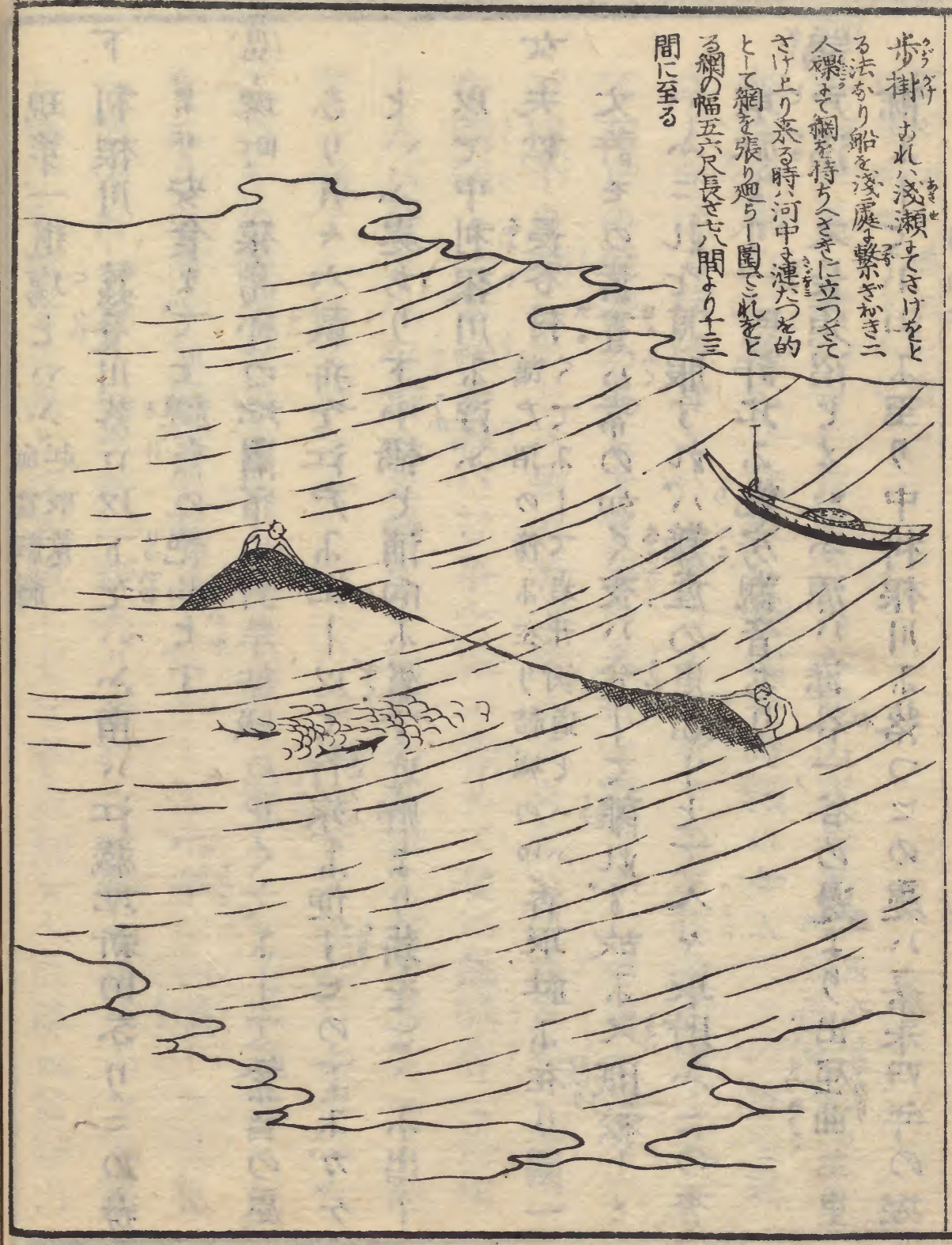
いふこれを煎服すれば難産の患ハ一とて人々取貯ハこの香

取社より一町許北ハ乳房觀音あり

鶴戸沼 又長須沼といふ源ハ洑谷一谷の邊より出屈曲三里

餘ハ一て小山ハ至り中利根川ハ落つこの處ハ嘉永四年の堀

歩掛 あれ、淺瀬までさげると
 法かり船を浅瀬に繋ぎかき二
 人裸まで綱を持ちさき立つと
 さげ上り来る時、河中連たつを的
 とし綱を張り廻らし圍でこれを
 網の幅五六尺長き六間より十三
 間に至る



割ありすべてこの邊の地勢を相馬日記卷三ある齋藤徳左衛
 門の談あ弁せて考ふるふげふ往昔ハ蠶養川衣川飯沼の下流
 不連ふあり共ふ大おほなる湖うみと爲りしを相馬偽都の要害えんげと利根
 川畔せらハ但矢作等の小地を存せるあるべし
 八年下總國葛飾郡矢作三万石を鳥居彦右衛門元忠あ知行せる
 由見よゆ然しかるふ房總治亂記ふ上總の内ちトて同矢作あ鳥居彦
 右衛門元忠あ四万石されば下出島の西し鳥廣山の故跡とて有
 るハその湖の畔ほとりふて有りぬるうこの邊へ寺社の事諸國圭齋録
 下總國禪宗あ三石 後嶋郡大谷口村 泉福寺三石 妙覺院天台宗あ三
 石 後嶋郡光作村 眞言三石 後嶋郡本陽寺新義眞言あ十五
 石 後嶋郡岩井村 眞言三石 同知敏院三石 矢作自立村 三
 石 後嶋郡延命寺五石 同眞言三石 同知敏院三石 矢作自立村 三
 石 鷺明神同院 五石 歡喜寺五石 同知敏院三石 矢作自立村 三
 石 山圓坊五石 後嶋郡長谷村 三石 同知敏院三石 矢作自立村 三
 大圓坊五石 後嶋郡西光院三石 同知敏院三石 矢作自立村 三
 三石 金剛院時宗あ二石 二斗 後嶋郡觀音寺三石 後嶋郡觀行寺
 若林村

川北

三

嶋郡 大光坊 十石 國玉大明神 後嶋 飯塚左京村 五石 八幡宮 長須坂村

治部丞あくと見之り

保地沼 岡田郡飯沼の下流あり末ハ二不分れ法師戸不至りて

中利根川不入るその下の方ある流平時ハ水無

衣川落口 相馬郡大木村不在りて、の川中不我慢といふ處あ

り對岸ハ水堀村あり衣川本名ハ毛野川不て續日本紀卷廿九

天平寶字二年條常陸風土記新治郡注不見ゆ延喜兵部式不下

野國衣川驛倭名鈔不下野國河内郡衣川と有るも專この川不

因りての名あり 衣川歌枕名寄卷廿四不懐中抄を引たりこの

國誌上卷相馬日記卷一 外廻國雜記不と歌ありあ不この川の事常陸

下野國志不と見えり

普門山禪福寺 筒戸村不在り諸國圭齊録下總國禪宗不十三石

八斗余 相馬郡筒戸 禪福寺と見ゆ ○相馬日記卷三云筒戸村の禪福寺

といふ不詣て、洪鐘の銘を讀む不大日本下總州相馬郡筒戸

村普門山禪福禪寺万治三庚子天七月初三日住持當山中興開

山大麟玄綱比丘尼銘焉とあり本尊ハ平將門ヶ渴仰せ一等身

の十一面觀音の木像ありもと上總國の花岡といふ里より遷

一まゐらせとありといへり等身の由來ハ二中歴不見ゆ 二 中

二造佛歴佛像寸法之條不五尺者弘法傳漢土時人長寺の傍不

也近代謂之等身と此條時鄰が標注不見えり

最舊き石卒都婆あり鑄りたる字無ればその姓と名とを知

りず寺僧ハ相馬氏の墓標ありといふ又玉山宗雪慶長十六已

二月今日と鑄り一五輪あり連歌師あどのこ、ふて身まゝれ

るふや

平將門舊址 平將門の事ハ將門記 大須本 大系圖扶桑畧記卷廿

五大鏡卷一外記日記卷一二舊本今昔物語卷廿五古事談源平

盛衰記卷廿三本朝文粹卷二元亨釋書卷十皇和真俗通卷十二

大日本史卷卅二日本外史卷一不見えて遍く人の知る所あり

三川北

三十九

然して佐原の清宮氏多年この事迹を考へ勞くあれハ今ハ彼人ふ譲りて此ハ相馬日記を省畧して記す并せ考ふべし相馬日記卷三云守谷野ハ最廣き野ふて目と遙ふ見かすむ許あり是相馬の偽都の構の内ふて兵士らぐいむらひ跡ありといへり矢田部海道を経て行けば守谷の里あり德怡山長龍寺の門ハ淺野氏と木村氏とが花押せし古き制札あり又牛頭天王の社ありてその御形ハ鏡ふ坐す裏ふ下總國守谷卿牛頭天王守護所大同元年丙戌九月廿一日神主吉信と鑄つけたり村長の齋藤徳左衛門が家を訪ひし主人喜びて俳諧師鳥醉がこの里ふ遊びし時記し記しとう出て見せたりさて徳右衛門文伯醫師木村氏嚮導して相馬の偽都の舊跡尋めて分るふ先相馬小次郎師胤が城跡ありて今ふ乾壕弁形あどの形昔の儘ふ残れり師胤ハ千葉介常胤が三郎子ふてその裔相續き徳仁

年中までこの城主ありといへり按ふ相馬氏の没落ハこれ國眞壁郡下妻の多賀谷修理大夫高經が小田天菴滅亡の虚に乗じ地を廣めむとて下總國岡田郡古間木城の渡部周防守元綱を攻めし事を常總軍記卷十二に記し相馬城方如勢の兵羽生式部石塚右京土岐越前荒木三河相馬求馬土岐彈正添屋を以て相馬郡守谷高戸の兩城主相馬左近大夫治胤を伐し一めなる事關東古戦録卷九に一時見ゆかくて明年七月十一日小田原落城の後佐倉東金等と一時見ゆ去り同八月九日領地拜領下總國の内ふ同相馬菅沼山城守定後元和といふ年の頃土岐氏の君こふ住まれしが上野國沼田城へ移らしてよりこの城遂ふ廢れぬとぞ島の中道を東へ廿町餘行けば大塚曳橋さといふ處あり平臺といふハ最高き岡ふてこそ將門が住みし所ふる又眩く許の深き壑を渡りてハ幡廓ふ移る將門が齋き祭りし妙見八幡と申すごとふ鎮座しを今ハこもり山の西林寺ふ移しまるりせりといふ山下文小こもり山の擁護山清淨光院といへりとぞと見ゆ諸國圭齊録下妙見八幡と申總國禪宗相馬郡ふ二十石西林寺と見えたり

三 川北

三十一

す由ハ妙見菩薩と相殿不祭れるふや昔物語不將門が八幡の
陳宣を偽り事ありこの所より八千町の田面打越一奥
山一臺向地赤不け岡村がううあどいふ所々目路遙ふぞ見
渡されたる齋藤氏語りぬりく古ハ相馬の偽都の周ハ都て湖
湛へてまふさき要害の地あり一を寛永といふ年の頃衣川の
流を南へ決りて数万頃の新田をバ開られ一といへり今と猶
田の真中不池残りて蓮ふの生ひるる多うり熟相馬と命
一名の所由を考ふるふ所の體淡海の中の一庭かれバ狹場と
いひむを音便ふさうまると轉一いふふるべ一按ふこの説
猿島ハ小島の義あるべし漸水涸れ泥乾きて許多の村々を爲ハ長
洲等のミさかり一古事ハ知り後世の書かハ常總軍記
あるべしおさかり古事ハ知り後世の書かハ常總軍記
りるべしおさかり古事ハ知り後世の書かハ常總軍記
卷十二多賀谷高經下總國岡田郡發向の事記ハ高經岡
田郡を攻むる諸士極めて加勢の人々大驚き岡田郡を
見打の邊の諸士極めて加勢の人々大驚き岡田郡を

瀨主膳昔生の石塚權兵衛内守谷の橋本石見野田の野田角牛
實珠花の平岩主水大山の學以下七餘騎を以て馳來る
とハ一へる野田寶珠花をおきてハ相馬郡の地あるを以て考ふ
べし又長洲ハ古長須卿とてハ相馬郡の地あるを以て考ふ
土宗後嶋郡ハ長須卿とてハ相馬郡の地あるを以て考ふ
十五石後嶋郡ハ長須卿とてハ相馬郡の地あるを以て考ふ
四石後嶋郡ハ長須卿とてハ相馬郡の地あるを以て考ふ
原といへるハ田中の離島不て縦横不上道一里餘の廣野あり
昔淡海の廻れる時ハえといハぬル一きの島ありむとぞ思
ひやれる、今この野中を行く道をかうう海道とよべり抑
かううといふ名何とも心得がまきをよくおもへハ將門記
今昔物語ふと不辛島と見え一をかううといハ訛れるふて辛
島の廣江といへるもこの周の田とあり一所を指せるあり
この辛島廣き地不て古ハ郡の名不もよびハるハ將門記不
陸介良兼が將門を襲ひて下總國豐田郡栗栖院常羽御殿を燒
き一條不將門を勞身病隱妻共宿於辛嶋郡葦津江邊依有非
常之疑載妻子於船泛於廣河之江といへるも葦津といハるハ因
りて廣河廣江といハるハ葦津といハるハ因りて廣河廣江といハるハ因
さりバ以相馬郡大井津号爲京大津とあるもこの邊あるるか

三 川北

三十三

くて天慶三年二月十三日貞盛秀卿が將門の宅を焼き一條
新皇擬相弊敵等引率兵仗隱於幸嶋之廣江と有りこの時焼く
れ岩井卿島廣山故跡といふ者これ平時ハこを住
馬郡事ある時ハ守谷不棲する者此れハ明る十四日
の戦始且帶辛嶋郡之北山張陣相待矣といへりかくてこの日
ひて敗死せるも直北を逐へるハありて風下と爲り再戦
の事知るべし改めて引きつその意を待つ又將門記古事談不
ハ島廣山と見ゆこれも廣き島山然ふべき事あり佛
島といふハ堀を廻りて構へし草木茂り暗がりておぞ
まき古墳あり中少許艸おひぬ所あるを強く踏めバ地ふ
響ありて聞こゆこれやこの兵器ふとあま埋ミ一が故ふそ
の鉄氣不因りて草と木とおひいてぬあるべし里人これを將
門が墳ありといへり佛島と名づけしハ傍ふ地藏の石像又ハ
何くれの佛の石像立てればあり坂を登りて高き岡ふ大日堂
あり古き松ふと有りて眺望好しき所あり將門がうまれし跡

ありといふ熟この堂の貌を見るふ古墳の上ふ建てたるあり
これ將門が骸を埋めむ所ふてかの佛嶋ハ伴類の屍ふや兵
具ふと埋めたるべし米野井の桔梗が原といふハ將門が妾
桔梗の御前といふが殺されたる所ふてその墳あり今も桔梗
ハ有りかぐら花開く事あきハこの御前が怨ふ因れるかりと
いへり海禪院といふも間近しそこハ將門が高野山の貌を摹
して先祖の墓を造りし所ふりこの寺の新皇堂といふハ將門
が靈を祭りて國王明神と稱へしり按ふ諸國圭齊録下總國禪
高野村海禪寺今日廻り見し相馬の偽都の體を思ふふ上道四
と見えたり
里許が間ふて湖の中島ふれば上とふき要害の地ふれば朝廷
不叛き奉りしハ僅九年をくりし一門悉亡びふき
つ波の風ふあれむ幸島の廣江をあせておとよきこそは 高田與清

按ふ相馬日記ふ相馬小次郎師胤ハ千葉介常胤が三郎子あり

といひされど非あり千葉大系圖を按ずるに常胤の次男相馬
 次郎左衛門尉師常あり三男ハ武石三郎左衛門此れより以下義
胤五郎左衛門尉綱次郎左衛門胤繼二郎兵衛尉胤之丞葉介成胤依相馬左
分与相馬家傳領也使胤繼分領下總國相馬郡居于守谷城此
奥州武州常州郡村領之仕將軍家頼嗣卿宗尊親王勤忠勤此
孫堂雄護山者醍醐天皇延喜二年草創也胤繼の弟胤村與州
相馬の胤盛男あり兵衛尉胤頼胤三胤國胤衛門尉胤忠重胤四郎左
胤望上野胤長勸満隆持仲謀叛千葉介胤直胤子胤出陣胤長胤應之
出張有等父子相傳ありさて天文十八年三月千葉介重胤不從
戦功
 て小田原城入りハ相馬二郎胤高ありこの一系の外ハ小相
郎將門五郎常晴六郎常澄後佐賀六郎九郎常
清左馬助貞常何と千葉大系圖不見之
 守谷城全盛の時の童謡として今猶傳ふる者あり左に載す
出ロ五本朴樹
城ノあまりてまちよさく
本ノ誤あるべし

まどのでぐちのご不えぬき花いさむり葉はたぐい花はよりやのいろよさく
 城ノあまりてまちよさく
 按不始の花字ハ
 本ノ誤あるべし

眞王山延命寺 岡村不在り相馬日記卷三云岡村の眞王山延命
 寺に詣つ後の林中の大なる樅の木の下に墳ありて小き石の
 小祠あり傍に木葉屑を埋めて五輪の缺残れるがあり四十
 年前本尊地藏薩埵の開帳せし時この墳の中より瓶一掘出せ
 りとぞその時將門が七人武者の塑像と馬の土形といふ物を
 開帳詣の諸人に見せり七人武者の土形をハ瓶と共ふ
 再と、不埋め二の馬の土像をハ駒塚に埋めぬといへり駒塚
 ハ寺の南の傍に在りこの土形どもハ布施の辨天の祠に年久
 く傳はりてを乞求めて將門が時の物の花ふいひふり、あり
 とぞ按ふにハ古の葬送具にて土師宿禰が作りいで、殉死
 人不易へ一物の類あるべし寺の北の方なる子飼川の流を堰
 留めし太郎堰といへる大堰あり洲崎の荒松原に辨天の御鹿
 香有りてその景色繪ふ書きならむ様あり按ふにこの時嚮導せ
ハ岡村の林兵衛

三川北

三十四

和田村の由右衛門あるがこの二人の事ハ勸善録不載せり
そも勸善録ハさよであらぬ人をも載せざる誚あれどこの二
人ハげ不載すべき績あれ
バ引きて因ふ下不記す

勸善録中巻云下總國相馬郡岡村の林兵衛和田村の由右衛門
藤兵衛三左衛門おと多く孝貞の友聚まりて廢田一町九段許

を開きりりその廢田不澁田鹿田おといふ名あり澁田とハ窪

き田不て水常不溢れ稻苗水の爲不腐れ廢るをいふ鹿田とハ

土質よろしうらず水も足りぬをいふと云むその里の佐兵衛

七郎兵衛人名おとさる廢田とさりれるを林兵衛由右衛門藤

兵衛三左衛門三輩田主不力を合ハせて墾開き今ハ良田とあ

りて年ごとの貢米滞おく奉れりといへり

大鹿城址 天正年間小田天庵の麾下あり一鹿左衛門の居處

あり常總軍記卷十一云爰不下總國相馬郡小文間一色宮内ハ

小田の味方不て有り一がこの頃佐竹不降りて近郷を脅し手

を廣くせむと思ひ一がかねて中惡うりにれば先大鹿不攻懸

て大鹿左衛門を亡不一かの世帯を押領せむとて二百餘騎に

て不意不大鹿へ押寄せさり時一も大鹿左衛門ハ所勞不て居

さりたる所不関をあげ一うハ家子須川平治を呼び何者うよ

せつりむ思ふ不小文間の一色めからめ憎き奴らささりあ

り我此體不てハ中々矢の一筋も射出難一足弱を片付にて

我ハ腹切るべ一汝宜く片付くべ一と云一うハ須川表不走

出て家人を聚むる不漸雜人共不五十人許あり一うハ先奥方

を始女童を皆呼集め後の山傳一てかりき命を遁れ同所の弘

經寺へ隠一たり是大鹿が菩提寺ありかくて足弱を片付れ一

うハ今ハ心安一と須川を始切て出て散々不戦ふその隙不大

鹿左衛門心静不切腹すこの文の續ハ下の

按に大鹿の城址ハ弘經寺の三町むかり南ある山上不在り山

川北

三五

南の田園を城下といふ其處の田中不鹿塚とて有るハ由有り
げあり

大鹿山弘經寺 諸國圭齊錄下總國浄土宗部云五石 相馬郡相馬御 弘經寺

常總軍記卷十一云大鹿弘經寺ハ浄土宗あり下總國岡田郡飯沼弘經寺の隱居所ありといふ又結城も弘經寺といふ有り同宗あり中畧大鹿ハ十八檀林の外不て百石御朱印あり權現様眞那板不御書下とあり因て今不眞那板御朱印といふありすべて浄土宗常總不弘經寺といふ寺三寺あり

大鹿山長禪寺 鹿島日記云近嶺德基と共不最高き石坂を登りて大鹿山長禪寺不詣つこの椋利根川不臨きて西南の空遙

不富士峯のみさけのれとるえも言ひ難一寺ハ妙心寺派の禪宗不て文曆といふ年の頃織部時平てふ人金を施して建つとかむ時平が法名を記してる位牌不大悲院殿花輪平公大禪定

門と見ゆこの里ハ昔大鹿左衛門某が住ミ一岩の跡ありとぞ按不大鹿の城址ハ既不上言へるが如く此處不ハ岩の有り一あるべし城址ハ此處の西稍北不在りて十二三町を隔つ

さてハ麓ある取手宿ハそれ不因れる名あるべし中畧近隣不

臺宿村あり取手宿より東不續きとり古き名ハ何といひとむ

今臺宿といふハ取手よりも高き所不在る宿おれハあるべし臺ハ夕平ヒラの省謬ある由下不いへり

按不諸國圭齊錄下總國禪宗部不五石三斗 大鹿村 長禪寺と見

ゆ境内不光音骨堂あり 寺寶不光音の光音ハ此邊不四國八十

八所の靈場を摸一設けとる人ありそハ 臺宿村 不動院

大鹿山長禪寺 地藏堂 同村 樂師堂

臺宿村 地藏堂 同村 樂師堂

取手 西照寺 同村 念佛堂

吉田村 嘉納院 同村 本泉寺

同村 樂師堂 小文間村 安養寺

同村 成就院 同村 地藏堂

川北

三六

取手宿 江なり水戸は行くの官道よりて地名ハ上の山ハ大鹿
 氏の岩有り一不因れるあるべし此處の聞人澤近嶺の家ハ新
 町ふ在り油屋與兵衛といふその詠歌を伊能顛則が撰ひ載せ
 るる香取四家集の末不清官秀堅がその小傳を擧げりその
 文不澤近嶺原姓谷澤 小字吉次郎又定次郎稱與兵衛號月舎晚
 號梧桐庵相馬郡取手驛人年甫二十八村田春海之門與清清水
 濱臣等切磋磨礪其作歌雖好新古今集樣能占地歩不流纖巧中
 畧 天保九年戊戌八月二十二日歿年五十所存雜記二卷梧桐
 菴歌集一卷といへり詠歌多うれハ因ふ一首を擧ぐ
 護山禪師甲斐國不歸りれる馬の餓不法華經を贈りてよめる
 かひくこの雲のあふる君すまはまに影しきものぞ 澤近嶺
 因ふいふこの護山禪師ハ甲州惠林寺の隱居不て長禪寺不住
 道徳高き禪師ありたり一時近嶺が世不寃鬼ハ無と言争
 ひけるをさらバ見ふ來ませといひはれバ村中の腕立する者
 を誘ひ連れて行きて物語りひつゝ禪師の教のまふ本堂ふ

母ふり驚きさて戒めたるハ丑時不佛前不磬の聲聞ゆべし
 れどりめ驚きさて戒めたるハ丑時不佛前不磬の聲聞ゆべし
 を著手不線香を持ちて衆人の中不近嶺を後不從ハしめ墓所
 不至り暫讀經一法衣の袖を褰げされバ屈まり居てそこより
 窺ひにる不黒繻子の知れる家の女髪をバ島田といふ不結ひ柳絞
 の單衣不黒繻子の知れる家の女髪をバ島田といふ不結ひ柳絞
 一居り見ると不魂消えて吾とハ無し不退きて本堂不逃歸り
 物をと言ハて臥不死るるを百日誦經して成佛ふ歸りそハ繼
 母の爲不追りて縊死るるを百日誦經して成佛ふ歸りそハ繼
 せしが己廿八日不あれるありとぞ當時ハ聞く人多くて誰と
 知りたる事
 ありとあむ
 この宿の本陣ハ添野民部の後不て舊家あり庭不水戸景山老
 公の歌碑ありげ不御歌の如く利根川の渡船取手度眼下不見
 不富士を雲端不望とて景色ハハむ方ふ
 きてゆくさねのとりてのやうも思ふ方へとくつきふたり 景山老公
 床不紙貼りて下方不纜不瀑布の圖かきさる上不御筆を添め
 多ふこの御筆迹ハ襦装
 出ぬの衣やさす春すきて夏きてふつる白く
 景山老公

川北

三十八

この家の後ふ一の古道あり佐倉街道といふそハ常陸國筑波郡山王新田ふて蠶養川を渡り山王渡下總國相馬郡山王村ふ入り毛有を經山王道大鹿ふ至て守谷道と合し取手ふ入り此處を過ぎ牛頭天王社側よりオッホリふ出で利根川を渡り中峠村の内ある中峠といふ地ふ到り終ふ佐倉ふ赴くをいふ按中峠の峠を寺田德基が問ひさる高田與清が答へて相摸國大住郡の轉杞村といふ有りそハ嶺ある所あり云と相摸國て杞野の轉杞村といふ有りそハ嶺ある所あり云と相摸國ある立野良道ハ國史を善く讀みしる人ありそ曰く鹿島日記の中峠の説ハ誤ふて中尾落冊子ふ選ふ四方を見渡せばよたそヤのひよさきふおのうまくミハ打流すといふ今も山名ふ呼びて吾村ふ荷峯養老峯有りま下總ふて山の崖をテ隣ある立野村ふ荷峯養老峯有りま下總ふて山の崖をテヒヨといふ野村ふ荷峯養老峯有りま下總ふて山の崖をテこの説がふ理あり

本多氏城址

井野村ふ在り本多作左衛門重次の城址あり治房記天正十八年八月九日領地拜領上總部小井戸本多今も其作左衛門重次三千石と見えさるハ此の誤あるべし今も其の處を城内といふ鹿島日記云井野村ハ臺宿の東北の方に續

字あれバ舊き城の跡あるべし又花輪臺といふ所あり織部時平が法名を花輪禪定門といひしを思合ハするふ時平が棲所ありぬむと計り難し云云下ふ壇輪作りぬむ處又ハ武隈の北と北へど誤臺宿より西北ふ向て行けば左ふ井野天神社有ふて西北あり御林の中ふ御墓山ありその西北ふ屋敷といり猶行けば右の御林の中ふ御墓山ありその西北ふ屋敷といふ地有り昌松寺のさて本路歸りて左ふ普門院の故墟あり城内の東あり後今處の移るといふされども由緒あるを以て今も年ごとふ米一俵を賜はるといふ今も普門院ハ此處より北方ふ在りて左方同村昌松寺ふ隣り桑原村光明寺と三處對立す又本多家の香火院ハその上ハ城内あり南ふ堀内の隣村ある青柳の本願寺ありその上ハ城内あり西ふ萩原とあり路を隔て、右ハ花輪臺あり猶西北ふ行けば山王渡ふ出づ

小堀河岸 井野新田の地ふして岡堰より蠶養川を堰き入れらる流を利根川不落す處ふ然ハ一へり鹿島日記ふ出づトハ井野新田ありといへるハ利根川ふ臨こさる地ふして船宿稱呼ふつきて誤りさるあり

川北

三十九

五家皆寺田氏あり德基が家あり今水神を産神とす例祭六月
廿日夜ふ入りて神輿を船ふて利根川に流べ流ふ隨て靜下
るこれを御濱船ふの幕を張り鉾を立て懸く挑燈を掛け笛大
鼓囃物の聲高欄の内ふ起るこの時後舟より烟火を擧ぐその
數甚多しこれを見る人兩岸ふ雲集し持連ぬる燈八月の如
く水中ふ倒映して金波を生じ傍涼風ふ暑を消し酒食の興を
添へて寶ふこの地の壯觀あり

第六天山

小文間村ふ在りて松樹茂りさる山あり天明年間神
道徳次郎紫紬泰助おと言へる賊首黨を結びて此處に住めり
今も第六天社の西一段低き處に竈の迹ありといふ相馬口記
詰村ふて水戸路を横さまふ經て用水ふ沾ひて下る馬手の方
の見ヤリある山ハ相馬郡小文間の第六天山といふこ、昔
ハ盗人のあまゝ籠り居て往來の人を引剥おどせり
ふ今ハ適き大御惠ふ因りて然る煩も無しといへり
あるやいふ小文間山の末の松をさぐるむかしくを

御墓松

小文間第六天山の東ふ在りて利根川に近しこの邊す
といひその山下を南子ガラ小文間の城主一色氏の墓標あり
といふ川の向ハ芝原あり古ハその下ふ五輪塔ありといふ頗大樹あり景色最佳し

一色氏城址

小文間の戸臺ふ近き處に在り詰丸と覺しき處に
天神社あり下の谷を城内といふ
常總軍記卷十一云一色爲濟まゝりといと悦びて大鹿が館に火
をかけ勝鬨あげて酒宴して居りたるふ大鹿が家人かぬて
左衛門が遺言として聳の高井十郎ふこの由を告げしうハ高
井大ふ驚き又ハ怒て急ふ勢を集めたるふ常々一色ハ我慢押
柄ふして動れば鬪諍を好し者ふれば隣城と睦らうず又大
鹿ハ常ふ柔和ふして志平ありし者ふて人これを貴びればバ
憎き一色が仕業うふ今少早うむふハ討せまゝき物ある
を殘念至極ある次第して大ふ怒り其よりして我れと集り

江改宿野櫻訪漁
 正消愁赤鯉千絲
 網解疆一方鈎月
 盈烟柳浦舟繫碧
 蘆洲好景何當比
 菴公赤墜遊

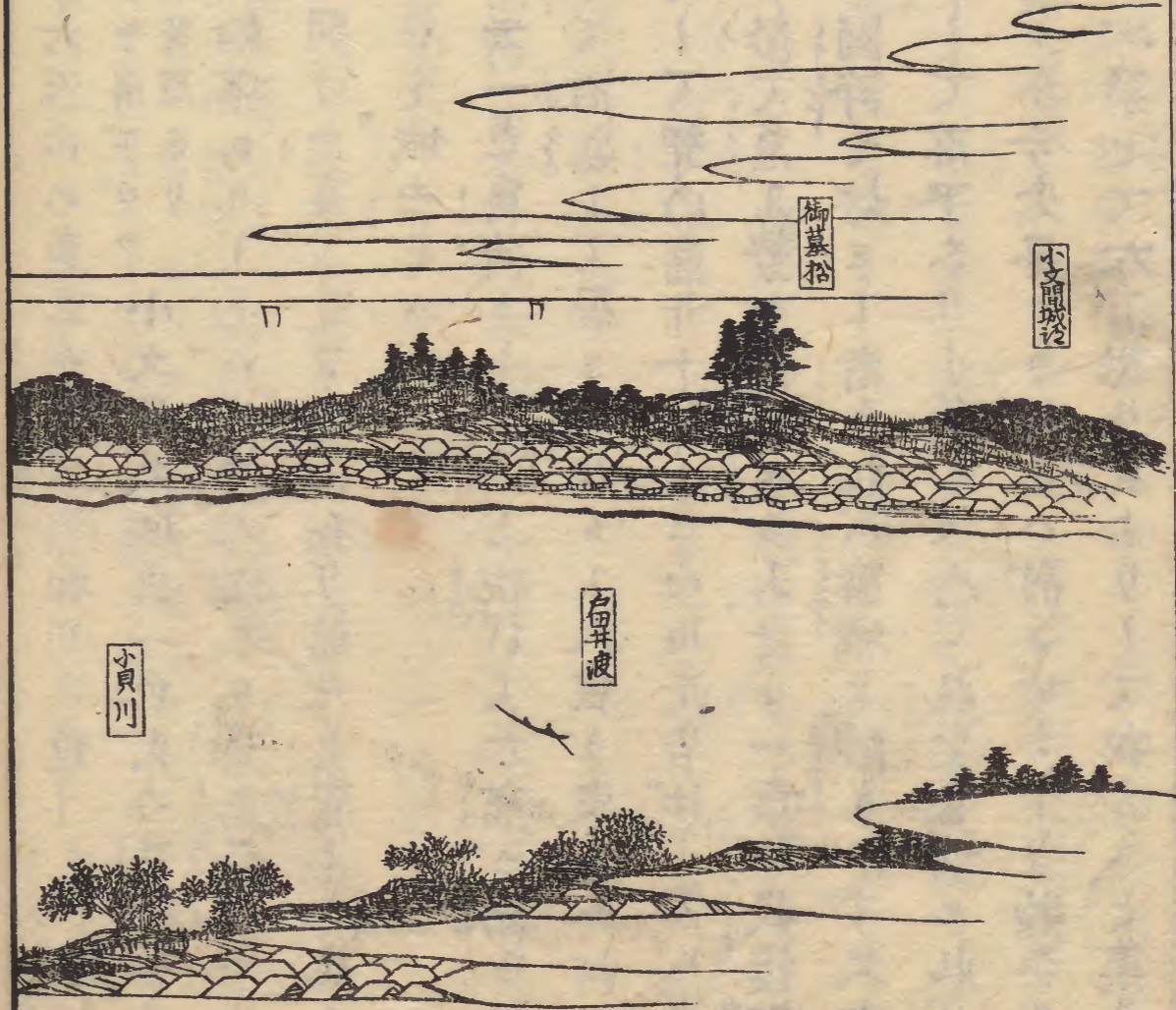
昇吟孝

引揚々

魚の光りや

夏れ月

柳屋



一

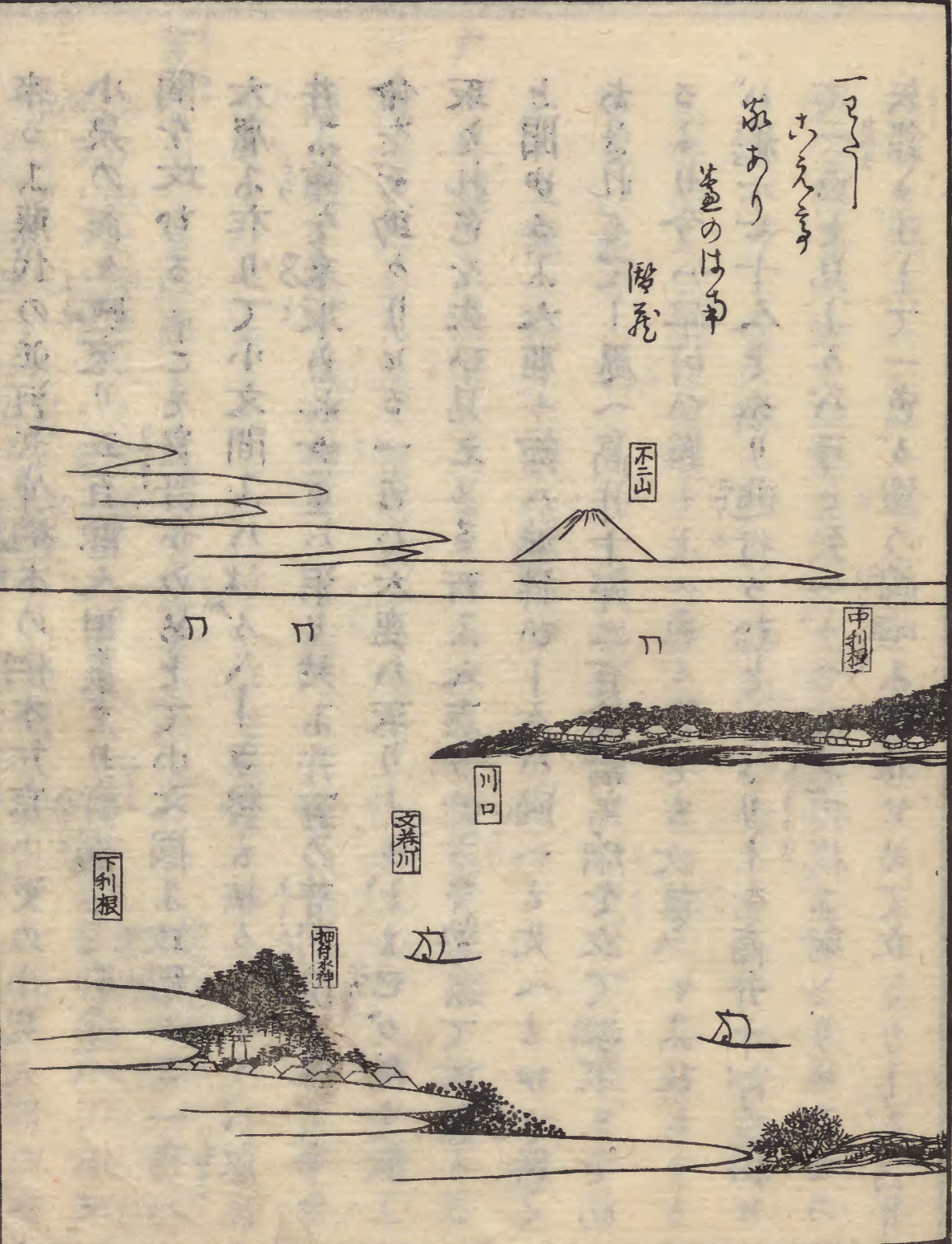
山あり

池あり

池あり

池あり

不山



三川北

四十一

來るふ藤代の並河兵庫柵木の柵木左京小更こまの小更大膳酒詰
小泉の面々馳來り五百餘人相集まり評議して引違へて小文
間を攻むるこそ良計りやうたかかめとて小文間せむら不攻懸くる一色ハ
大鹿おしか不在りて小文間せむらハはぐへき勢も無かりしハ忽高
井たか不館たかを乗取られ女童ハ泪なみだと共とも不井野の普門院ふもんいん不入いれずて辛あつき
命をぞ助かりたる一色ハ大鹿ハ取りしと己おのが館を敵不
取りれ色を失ひ見えたる所ところ不大鹿が味方多勢ふて攻懸くる
と聞ゆる不大鹿が館ハ焼拂ひしハ跡へと先へとゆき難く
あきれたてし處へ高井十郎二百餘騎馬烟を立て馳來るを見
るより今ハ早叶はやうひ難しと一色が勢どと次第々々不落ちし
ハ纒たづな六七十人とかり逃のが行ゆくむとしりしを高井十郎追掛おひかれ
て一色と見しハバ弓と矢つがつて追掛おひかれ射やりたるその
矢錯あやまとずして一色が鎧よろいの綿わた噛かみ不脊卷せませめて立たりし高井

固もとより精兵せいへいあれば一色二言にごんと云いはず馬より落ちし處を高
井たか郎等久野虎次郎起おこし立てす首をとる高井ハ大鹿をバ討
とせしと當あたの敵を打取うて勝鬨とんがあげ味方の面々へ一礼して
高井館たか不ぞ歸かへりたる由よしあき企こころして一色ハ滅亡めつたうしたるこそ不
覽あれ高井ハ其そのより小文間を普請ふしやうして究竟くわうけつの要害やうがいありし
ハ小文間せむら不移りて威いを逞たくまくぞしりたる

戸田井渡 小文間の内うちある戸田井と不たて蠶こく養やう川を渡る處ところあり筑
波山東北あに見えて景色最よし相馬日記卷三さむら戸田井ハ小文
間の内うちあれば堤つゝみを隔へて、子飼こが川の川邊かわべ不住すまむ田居のゐれば外
田居のゐといへるふやといへるハさる事ことあるべし

書卷川 常陸國より落つる蠶養川の落口おちぐちあり 蠶養川將門記こくやうせんもんき
堀子飼之渡ほりこがのわたと見え東國土人の説いふ文間せむら在ある 常陸下總兩國之
戦記いくさきハ古貝川ふるかいがわと右みぎり土人の説いふ文間せむら在ある 立木村たてきむら不文間せむら明神
爲なりすべしこの邊あたの地ちをと小文間の間ま不たて文間川せむらがわといへる

が誤れるありといふ古歌

水葦のかきかきせしと云れぬはふまき川といはふるべし

國花萬葉集卷十下總國部云書卷川名所不出按に名所景

物不見古河渡と同一流あり水上あり云これハ何處あるう

知り難し猶考ふべし

水神社 戸田井渡の東押村村に在りこの村桃園多し土人曰く

この村の一里許東に大平村ありをこゝに住まはるる人を尊びて

御大平様といふ一日此處に來りて魚を釣りにるを水神甚怒

り潜牛を乗り來りて釣竿を奪はむとせしうハ甚驚きて側を

藤蔓を投じたる牛の右角を係りたるを互に牽合ひたる

ふ終ふ角折れて別れしりとぞさればこの神體ハ右角をかき

潜牛を乗りたる木像あり別當徳満寺より出づる御影も同一

今も村人水神の嫌ひゆふとて藤を用ゐず又大平村の人を嫌

ふといふその御大平様ハ今もその村に於て祭りて大平權現と

いふ



利根川圖志卷二終

